

# 大蛇

観世小次郎作

前

ワキ 素盞鳴尊

立衆 従者一同

シテ(翁) 手摩乳

ツレ(姫) 足摩乳(謡なし)

後

ヒメ 稲田姫(謡なし)

ワキ 前に同じ

ツレ 従者

シテ 大蛇(謡なし)

「始めて旅に行く雲の。く。治まる国を尋ねん。

詞

「そもそも是は伊奘諾の御子素盞鳴神とは我事なり。

ツレ

「夫れ治まれる国の始め。混沌未分に分れしより。

新羅の国に天降り。それよりやがて旅衣の。

道行

「思ひ立つ。あしたの原も遙々と。く。見えて漕がるゝ海士小船。その水馴棹さしてなほ。行くへの波も八雲立つ。出雲の国に着きにけり。く。

シテサシ

「ながらへて生けるを今は歎くかな。憂きは命の科ならず。とは思へども思ひ子の。別れを慕ふ世の習ひ。我等夫婦に限らめや。身は老鶴の音にたてゝ。泣くより外の事ぞなき。

下歌

「見るからに。袂ぞ濡るゝ桜花。

上歌

「空より外に置く露の。く。身は幼き緑子を。誘ふ嵐は風よりも。烈しき物を川上の。大蛇の為に失はん。子の別れをば如何にせん。く。

ワキ詞 「我此国に來りつゝ。四方のけしきを詠むる所に。

こゝに怪しき疎屋の内に。いみじく涕哭する声有り。是は如何なる神やらん。

シテ 「我ならで訪ふ人もなき柴の戸の。明けくれ泣く音を今更に。尋ね給ふは誰やらん。

ワキ 「誰とも知らじ久堅の。天より降る神なるが。此国始めて見そなはし。こゝに尋ねて來りたり。

シテ 「そもや天より降ります。神とは何と木綿四手の。斯かる泣く音は羽束師の。もりける事よ如何にせん。

ワキ 「何をか包み給ふらん。早々姿を頭はして。謂を語り給ふべし。

シテ 「仰せにしたがひ夫婦ともに。歎きを止めて柴の戸を。

地 「おし明方の雲間より。く。神代の月の影清く。尊の御姿。あら有難のけしきやな。かくて夫婦の

老人。中に少女をすゑおき。歎き悲しむ有様の。心もとなきけしきかな。く。

ワキ詞

「如何に夫婦の老人。我は是れ伊奘諾伊奘冊の第四の御子素盞鳴の神なり。されども如何なる故にや御憎まれを蒙り。既に根の国とこの国に趣く。いまし達は如何なる神ぞ。少女を撫で、啼哭する事。そも何の歎きぞや。

シテ

「其時答へて申さく。やつがれは是れ此国津神なり。

地

「名は手摩乳。妻の名は脚摩乳と申す夫婦なり。

サシ

「然るに此乙女は是れ我子なり。名をば櫛稻田姫と申す。

地

「かやうに歎く其故は。先に我子八人の乙女あり。年毎に簸の川上の大蛇に吞まれ。今又此姫取られんとす。免るゝによしなしと言ふ。

クセ

「其時素盞鳴。詔して宣はく。実に理や老人の。歎く心を憐びの。恵みぞ深き川上の。大蛇を従へ。

治まる国となすべし。少女を我にたび給へと。宣  
へば老人は。喜悦の色をなし給ふ。

シテ「すなはち乙女を奉る。

地「やがて尊は稲田姫の。湯津の爪櫛取りなして。鬢  
づらにさし給ふ。其まゝ治まる国津神。こゝに宮  
居の二柱。立つや八雲の妻共に。八重垣造る言の  
葉の。三十一文字の詠歌の始めなるべし。

ロンギ地「実に有難き詔。く。さてや大蛇を従へん。其御

方便如何ならん。

ワキ「畜類の。心も兼ねて白真弓。八しぼりの酒を取り  
合はせ。さすき八間を結ひおき。酒船に酒をたゝ  
へん。

地「さてや八艘の酒舟を。簸の川上に浮べつゝ。

ワキ「乙女の姿うつさんと。

地「夕べの雲の波。煙も立つや簸の川上に。稲田姫を  
伴ひ。上らせ給ふ有難や。く。(中人)

ワキ、ツレ「声」光散る。玉の御輿を先立てゝ。尊は馬上に威儀を  
なし。簸の川上にと急ぎけり。

ワキ「そもく是れは。伊奘諾伊奘冊の御子。素盞鳴の  
神なり。簸の川上の大蛇を従へ。国土豊になすべ  
きなり。

地「八雲立つ。出雲八重垣妻ともに。く。鳥上の嶽  
にうち上り。簸の川上は是なれや。山聳え岸高く。  
嵐も波も声々に。物すさまじき川岸に。稲田姫を

一人すゑ奉り。波間に浮べる酒船に。御影をうつ  
し給へば。尊は馬より下り立ちて。岸に上つてひ  
そかに。出づる大蛇を待ち居たり。く。

地「川風暗く水渦まき。く。雲は地に落ち波立ち上  
り。山河も崩れ鳴動して。頭はれ出づる大蛇の勢。  
年ふる角には雲霧かゝり。松栢そびらに生ひ伏し  
て。眼はさながらあかぢちの。光を放ち角を振り  
たて。さも恐ろしき勢なれども。さすが心は畜類

の。舟にうつろふ御影を呑まんと。頭を舟に落し入れて。酔ひ伏したるこそ恐ろしけれ。

<sup>ワキ</sup>「尊は十握の神剣を抜き持ち。

<sup>地</sup>「尊は十握の神剣を抜き持ち。遥の岸より下り給へば。大蛇は驚き怒りをなせども。毒酒に酔ひ伏し通力失せて。山河に身を投げ漂ひめぐるを。神剣を振り上げ斬り給へば。斬られて其尾は雲を突ち。尊を巻かんと覆へば飛び違ひ。巻き付けば斬り払

ひ。めぐればめぐる互の勢ひ。神は威光の力を顕はし。大蛇を斬り伏せ忽ちに。其尾に有りし剣を取つて。叢雲の剣とは名づけたり。